
フルメタルギアソリッド

小笠原 裕嗣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フルメタルギアソリッド

【Nコード】

N9184Y

【作者名】

小笠原 裕嗣

【あらすじ】

その少女は何も知らずに育ってきた。自分の秘密も父親のことも…一人の少年は指令を受けてとある任務に就いた。ある博士に頼まれた任務に…
隠された秘密を巡って血と硝煙が世界に広がる中、二人は惹かれていく

とあるSS読んでたら浮かんできた妄想を無理やり広げて書き連ねていきます。パニックもスネークも関係ない内容ですので

プロローグ（前書き）

よろしければ批評をいただけると幸いです

プロローグ

彼女、石動桜花は父親こそいないが、一般的な少女だ。しかしある日学校に向かっているとその日は行く先々に無地の段ボール箱が置いてあった。当初は無視していたがその段ボール箱から視線を感じていたため、人気のないところに来ると怯えの表情をわずかに浮かべながら声をかけた。

「ねえ？ その人段ボールに入って何してるの？」
一瞬空気が変わった。

「何い！？ この俺の尾行が見破られただとお！」
段ボールから聞こえてきた声は若い男の声であったがやや間抜けに思える声であった。

「くう… かくなるうえh… …!!」
その男は段ボール箱から飛び出してきたが、少女のかかと落としが決まりその場に動かなくなった。「はあ… なんなのこのストーカー… …」

とりあえず110番をしてその少女はその場を立ち去って行った。
「ふう… …ここまで気が強いか」
頭をさすりながらその男は立ち上がり、少女が向かった方角を見据える。

「まあこの方法はもう使えないがまだ別の手段はある」
そう言うのと段ボールを片付けるが、
「君、ここで何をしている？」
警察官に挟まれていた。
「ちよつと話を聞か… …」

30分後二人の警察官が気絶しているのが発見される。

翌日になっても桜花の気分はよろしくなかった。その原因となった

のは昨日のストーカーである。

実は朝の時点では彼女はまだ気分は悪くはなかった。しかしHRで起きた事件が問題だった。

「えゝ色々話す事はゝありますがゝ一つだけ伝えますゝ」

皆から爺さんと呼ばれる担任のいつも通りの話し。

「えゝ突然ですがゝ転入生をゝ紹介しますゝ」

それは前触れのない突然の言葉だった。クラスの中がざわつく。転入生の話など前日まで聞いたこともなかったから当然であった。

「えゝそれではゝ入ってください」

担任がそう言い終わると教室に一人入ってきた。体格は良く、引き締められた男らしい無駄のない筋肉。例え制服の上からであっても見る人が見れば十分に分かる体つきであった。顔には老けて見える、苦勞を感じさせるシワが刻まれていた。明らかに浮いた存在であるがそれを気にせず、教壇の横まで淀みなく歩いていった。

「えゝそれでは自己紹介をゝお願いします」

その男は教室の全員を目を動かすだけで確認した。皆見たことのない容貌に目を奪われていたが、一人の少女は違った。

（どこかで見たような？）

必死に記憶を手繰るが彼女は思い出せない。（最近見たような…）

「本日付で本校に転入することになった草薙尊だ。よろしく頼む」その言葉で全ての記憶が彼女の中で繋がった。

「あなた！昨日の段ボールのストーカー！」

彼女は大きな声をあげていた。皆の視線が集中する。

「……」

そして沈黙が生まれた。

プロローグ（後書き）

初めての投稿ですのでアドバイスしていただきたいです

第一話

放課後、桜花はあの後学校であったことを思い出しながら逃げるように家に向かっていった。明らかな不機嫌さを隠すこともせず、顔に出していたがそれには本人は気づいていないようだ。

（ああもう！ あんな段ボールなんか気にしなければよかった！）
気がつくと昨日初めてあのストーカーを見たところにいた。それはいつも通る道であるので当然である。周りに人の気配はないところなので待ち伏せにはちょうど良さそうではあった。

「何が目的なのよ……」

歩きながら小さな声で呟き、ふと目線の端に3人の黒ずくめの男がうつっていた。男たちは見つかったのを合図に突然向かっていった。

2人の男は逃げ道を塞ぐように周りを囲み、もう1人の男は正面からつかみかかる。突然のことに状況を把握できずにいたが、とっさのハイキックをつかみかかる男に向かって放つ。

「え……」

しかしそのハイキックは目標を捉えることはなく、気がつくと桜花は地面に押さえつけられていた。

「や！ やめ……」

抵抗の言葉を話しきる前に桜花の口は塞がれた。その直後、逃げ道を塞ぐようにしていた男は拘束するために桜花に近づいていく。もう1人はどこかに連絡をしている。

拘束されるまま抵抗もせずに桜花はおとなしくしていた。恐怖の表情を浮かべたまま、ただ視界の端に映る連絡をしている男を見ていた。

すると突然糸が切れた人形のようにその場に男が崩れ落ちた。それに反応して男たちは懷から即座に拳銃をとりだし周囲を警戒する。

「何が起きた！」

「分からん！ この場を速やかに離れるんだ！」

男は拘束した桜花をかつぎ指示を出す。

「先行しろ！」

2人は同時に走り出したが、桜花はそれを邪魔するように暴れだした。

「おとなしく……しろ！」

握把を頭に叩きつけ脅しをかけた。桜花の頭から一筋の紅い液体が細く流れる。

そのとき黒い影が男に飛びかかってきた。

「離せ！」

影はそう叫ぶと桜花を抱えた男の左襟をつかみ足を払い地面に叩きつけ、それと同時に桜花を自らの腕の中に抱え込んだ。

それは一瞬の交錯であったため先行していた男が反応したのは全てが終わった後であった。

「きさまぁ！」

手に持った拳銃を現れた人物に向けて引金を引く。それは素人目に見ても速いことが解るものだったが、

「甘い！」

難なく回避していた。

それはあり得ない光景だ。銃弾を回避するなんてそれこそ漫画やテレビの中の出来事だ。

「ッ！」

驚愕したが避けられたならもう一度撃てばいい。気を取り直して再び狙う。幸い一度の回避で体制を崩している。次こそ当てる。

再度指に力を込め引金を引く。

……しかし引金を引ききる事はなくその場に力なく崩れ落ちた。先程現れた男、草薙尊の手についての間にか握られていた拳銃。そこ飛び出した葉莢は近くに落ちていた。

「……あなた何者よ」

そのすべてを見ていた桜花は当然抱いた困惑をぶつけずに入られ

なかった。

「……おまえの……ボディーガードだ」

「なにそれ？」

そこは微妙な空気に包まれてた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9184y/>

フルメタルギアソリッド

2011年12月31日21時48分発行